

# 「江戸時代の教育について」

2018年 7月21日  
公益財団法人  
忍郷友会  
会長 松平 忠昌

## 1. 江戸時代の教育制度

- (1) 藩校
- (2) 寺子屋
- (3) 私塾

## 2. 藩校について

- (1) 忍藩校 進脩館
- (2) 藩校の歴史
- (3) 藩校の学則

## 3. 四書五経とは

- (1) 四書
- (2) 五経

## 4. 藩校サミットの紹介

## 5. 忍郷友会について

## 6. 今 求められるものは

- (1) 古典、歴史に学ぶ
- (2) アナログ VS デジタル
- (3) 違いが判る — 出逢いと思ひ遣り
- (4) リーダーシップ — エリート教育
- (5) 日本人の誇り

## 7. 皆様へ

## 1. 江戸時代の教育制度

(1) 教育制度は、定まった形ではありませんでしたが、以下の3つに代表されます

- ① 藩校
- ② 寺子屋
- ③ 私塾

(2) 学校としては、1669年 岡山に「寺子屋」が開設されたのが最初とされており、1790年(寛政 2年)に幕府の学問所として整備された「昌平坂学問所」(昌平黌)は、後の学者や教師となる人を輩出することになったのです

(3) 上記制度の概要は以下の通り:

- ① 藩校は、諸藩の藩士やその子弟のために設立された学校で、当時は全国の諸藩(300諸侯と云われる)が競って藩校を設け、教育に力を入れていました  
武士社会に生まれた男子は例外なく、藩校で古典(四書五経)を学び、昼は藩校で文武に勤しみ、夜は私塾に通って、勤勉な学習生活が習慣付けられていたようです
- ② 寺子屋は、町民・農民など庶民の教育施設であり、天保時代に急増して、幕末には全国で15,000カ所あったとの記録があります  
読み書きと算盤が教えられており、日本の学力向上に役立ったと云えます  
教師になった人は、僧侶、医師が中心で、寺子屋はお寺の庫裡、本堂や講堂が使われていました

- ③ 私塾  
藩校と寺子屋の中間的な存在で、どちらかと云えば「官」の経営が多かったようです  
文字通り「私立」の教育施設であり、全国で1,500カ所もあったとされています  
有名なところでは、「中江藤樹」や「荻生徂徠」といった儒学者が経営したもの、「緒方洪庵の適塾」や「吉田松陰の松下村塾」などがあり、幕末には著名・有名な人材を輩出するに至っています

(4) 上記教育施設における教師・先生は、以下のようでした

- ① 藩校： 昌平坂学問所の前身とも云える「儒学の私塾」が1630年(寛永7年)に徳川家康公の認可を得て開講され、そこで学んだ塾生が各藩校の要請を受けて教鞭を取ったと理解されています
- ② 寺子屋：  
武士、僧侶、神官、豪商、商工業者や儒学者が教師・先生となっており、その経営は多様だったようです
- ③ 私塾： 経営は全て私立であったが、一部には藩の支援・要請で設立され家塾とも云われ、藩士の子弟が通う塾でもありました  
従い、「官」の施設とも云われる所以がここにある参考までながら、費用の面では「私塾」が最も高く次いで「寺子屋」だったようです
- ④ 藩校と寺子屋の果たした役割は、計り知れない程大きなものがあり、近年の世界における日本人の学力の高さ、中でも「識字率」の高さは、この善き教育制度にあったと云っても過言ではないと考えます

## (5) 昌平坂学問所

- ① 1630年(寛永7年)に徳川家康公の認可を得て上野忍岡の屋敷に「林羅山」が営んだ「儒学の私塾」を起源とする
- ② その後 1690年(元禄3年)に徳川綱吉が神田湯島に孔子廟の移築を命じ、「孔子」の生地である「昌平郷」に因んで「昌平坂」と命名された
- ③ 1790年(寛政2年)「寛政異学の禁」により、幕府の教学政策として「朱子学」が奨励され、その一環として林家の私塾から「学問所」を切離し、直轄機関としたことが「昌平坂学問所」の成立となった
- ④ 明治維新後1868年(慶応4年)新政府に接收され、1870年8月(明治3年)に休校となり、その後廃校となっている

## (6) 松下村塾

- ① 1842年(天保13年)吉田松陰の叔父 玉木文之進が開いた「私塾」
- ② 1857年(安政4年)吉田松陰が引き継いで経営
- ③ 幕末を生き延びて明治新政府で活躍した人々を多数輩出している
- ④ 主な人物として伊藤博文、山縣有朋、品川弥二郎、山田顕義、等が挙げられる

## 2. 藩校について

### (1) 忍藩校 進脩館

#### ① 藩校「進脩館」沿革

- ・ 本館ハ文化10年松平忠翼侯ガ勢州桑名藩主タル時創立シタルモノニシテ館名ヲ進脩トセシハ儒臣澹所平井直蔵ガ易経ノ「君子ハ徳ニ進ミ業ヲ修メ時ニ及バント欲スル也」ト云ヘル語句ノ中ヨリ進脩ノ二字ヲ撰定シテ其扁額ヲ林祭酒述齋ノ子ノ樗宇ニ請ヒ揮毫セシメタルモノナリト云フ
- ・ 文政六年忠堯侯ガ武州忍ニ移封サレタ後 翌七年近藤棠軒ヲ儒臣ニ充テ藩士ヲ薰陶セシム
- ・ 文政八年棠軒亡キ後 芳川波山ヲ後継者ニ迎ヘ天保七年「進脩館」ヲ再興ス

#### ② 學規（抜粹）

- ・ 學問之道者 経學ヲ講究シ修己治人…
- ・ 経學之科 詩書、易、春秋、三禮等可有研究…
- ・ 歴史之科 正史通鑑等ハ勿論歴代制度沿革ヲ記シ候書總テ…
- ・ 文章之科 議論叙事之体唐宗八大家之法ニ依リ…
- ・ 右三科各人之才力ニ随イ或ハ素讀、講釈…

\* 学ぶ事と個人の能力に合った授業が考慮されていたと思われる

#### ③ 入学者の範囲、入学の年齢

- ・ 本館ニテハ藩士ノ子弟ニシテ年齢十歳以上ニ達スルモノハ必ズ講書ノ席ニデテ聴聞シ又ハ日々出席シテ経史ノ素讀ヲ學習スルノ規定アリ

#### ④ 授業法

- ・ 本館ニ於テ教授スル所ノ學科ハ
  - 漢學 教本： 小学、近思録、四書、五經、通鑑綱目、  
唐宗八大家文集  
上記以外ハ學業ノ進歩ト時代ノ要求ニ伴ヒ  
春秋左氏傳、史記、十八史略、日本外史ヲ  
教師ガ撰定シ生徒ノ志望ニ依リ學習スルコト
  - 軍學 漢学ニ次グモノトシ 軍事思想ノ啓發ヲ図リ  
攻城守防ノ方法等ヲ講シ 成績ヲ甲中乙トシ  
軍事ノ資料トシタリ
  - 算術
  - 習字 ノ四科トシ最モ重キヲ置クモノハ漢學

#### ⑤ 儒臣（抜粹）

- ・ 平井澹所
- ・ 奥平玄甫
- ・ 近藤棠軒
- ・ 芳川波山
- ・ 芳川襄斎
- ・ 平井竹溪
- ・ 平井井桐
- ・ 芳川春濤
- ・ 田中算翁
- ・ 吉田庸徳
- ・ 佐藤世寛
- ・ 黒澤翁満



## 「忍藩 進脩館」

文化10年(1813年)桑名において松平忠翼侯により創設された学校(進脩館)を文政8年(1825年)に松平忠堯侯により桑名から移設する形で引き継がれ、天保七年(1836年)に学舎が再建された

漢学のほか国学、書道、算術、兵学、武術、砲術など多岐にわたる学習が行なわれ、明治元年(1868年)の藩政改革により、国学館のほかに培根堂と洋学館が設けられた

卒業生には、林頼三郎(中央大学総長)、小川一真(写真家)、小山健三、江草斧太郎(有斐閣創業者)などがある

### 「藩校の扁額」

(行田市郷土博物館所蔵)



### 「進脩館 表門」 (忍城内に現存)



(何れも行田市郷土博物館にて撮影)



## (2) 藩校の歴史

- ① 全国の諸藩に置かれた「藩校」は、1669年(寛文9年)岡山藩主 池田光政が建てた「岡山学校」が初めとされています
  - ② その設立の過程で、「私塾型」、「家塾型」と「講堂型」に分けられますが、「講堂型」が主流になり、藩の管理体制下にあった訳です
  - ③ 1790年(寛政2年)に発布された「寛政異学の禁」が切掛けとなり、儒教が教育の中心となったこともあり、五常(仁、義、礼、智、信)と五倫(父子、君臣、夫婦、長幼、朋友)の徳目が教えられた訳で、人の道を習得する場でもあった訳です
  - ④ 学習の中心は、「儒教の古典」である「四書」(大学、中庸、論語、孟子)と「五経」(易経、書経、詩経、春秋、礼記)であり、「史記」、「漢書」、「資治通鑑」や漢詩の朗誦・作詩も学んでいました
  - ⑤ また、文武兼備の観点から「武芸」(武学)が課せられており、主に「剣」、「柔」、「射」、「槍」、「薙刀」、「馬」、「砲」の術と兵書の講義も必須科目とされました
- (3) 各藩校では、「学則」が定められた所もあり、その幾つかを次にご紹介します

- ① 会津藩では、幼年教育から「什の誓い」が教えられていた  
（「什」とは、6～10歳の男児十人を一単位とする組織）：
- 一、 年長者の言ふ事には背いてはなりません
  - 一、 年長者にはお辞儀をしなければなりません
  - 一、 虚言(うそ)を言ふ事はなりません
  - 一、 卑怯な振る舞いをしてはなりません
  - 一、 弱いものをいじめてはなりません
  - 一、 戸外でものを食べてはなりません
  - 一、 戸外で婦人と言葉を交へてはなりません
- 「ならぬ事はならぬのです」

10歳になると藩校「日新館」に進学

- ② 「造士館」(薩摩藩藩校)には「郷中」(ごじゅう)があり、  
薩摩藩士の子弟教育の根幹としていたとされる：
- 一、 第一武道を嗜むべき事
  - 一、 兼ねて士の格式油断なく穿儀致すべき事
  - 一、 万一用事に付き咄外の人に参会致し候はば用事相  
済み次第早速罷帰り長座致す間敷事
  - 一、 咄相中何色によらず、入魂に申合わせ候儀肝要たる  
べき事
  - 一、 朋党中無作法の過言互いに申し懸けず専ら古風を守る  
べき事
  - 一、 咄相中誰人にてても他所に差越候節その場に於て相分  
かち難き儀到来致し候節は、幾度も相中得と穿儀致し  
越度之無き様相働くべき事
  - 一、 第一は虚言など申さざる儀士道の本意に候条、専ら  
その旨を相守るべき事
  - 一、 忠孝之道大形之無き様心懸くべき候 然しながら逃れ  
ざる儀到来候節は其場おくれを取らざる様相働くべき事  
武士の本意たるべき事

一、 山坂の達者は心懸くべき事

一、 二才と申す者は、落鬢を斬り、大りはを取り候事にては之無き候 諸事武辺を心懸け心底忠孝之道に背かざる事第一の二才と申す者にて候 此儀は咄外の人絶えて知らざる事にて候

右条々堅固に相守るべし もしこの旨に相背き候はば二才と言ふべからず 軍神摩利支天八幡大菩薩武運の冥加尽き果つべき儀疑なき者也

③ 例に見られるような「学校則」は、現存しませんが、教訓に満ちた「自己管理」、「自己抑制」、「対人の心得」、「他人への気遣い」といった「心得」や「精神の置き所」の教育は、今見失われている教育とも思われ、是非復活を検討して頂きたいものです  
内容としても決して時代錯誤のものではないと思う次第

④ 藩校の教育は、武家社会に於ける「英才教育」で、江戸時代のリーダー育成を目的にしていたことが伺えます

⑤ 藩校の有名な所を北から挙げると以下の通りです

「興讓館」	米沢藩	1697年
「日新館」	会津藩	1799年
「弘道館」	水戸藩	1841年
「進脩館」	忍 藩	1825年
「花畑教場」	岡山藩	1641年
「明倫館」	長州藩	1719年
「時習館」	熊本藩	1755年
「造士館」	薩摩藩	1755年

⑥ 顕著な傾向は、外様大名と云われる諸藩での設立が早くからで、圧倒的に多かったことです

### 3. 四書五経とは

(1) 四書五経は、儒教の経書(教典)であり、

儒教は、「孔子」を始祖とする「思考・信仰」の体系です

- ① 紀元前の中国に興り、東南アジア各国で2千年以上にわたって影響力を持つ学問
- ② 学問的側面から「儒学」、思想的側面から「名教・礼教」とも云われる
- ③ 日本への伝来は、仏教よりも早く、継体天皇の時代513年に百済の五経博士が渡日して依頼のこととされている
- ④ これ以前にも「王仁(わに)」が論語を持って渡来したとの伝承が「古事記」にみられており、概ね「5世紀頃の伝来」と見られている
- ⑤ 江戸時代になると「儒仏分離」の動きが現れ、幕府による封建支配の為の思想として「朱子学」が採用された
- ⑥ 林羅山が「徳川家康」に仕え、「林家」が「大学頭」となり、幕府の文教政策を統制したことから武家社会に儒学が浸透することとなった
- ⑦ 五代将軍「徳川綱吉」は、幕府の文治政治への転換を機に「儒学」を重視して、1690年(元禄3年) 湯島に「湯島聖堂」(孔子廟)を建立して「学問所」が開講された

- ⑧ 八代将軍「徳川吉宗」は、「朱子学」を遠ざける傾向があり、一時「朱子学」が低迷することになるが、老中「松平定信」は儒学の中の「農業と上下の秩序を重視」して「正学」として復興した
- ⑨ 1790年(寛政 2年)「寛政異学の禁」を発令
- ⑩ 1797年(同 9年)には、「学問所」を「林家」から切離し幕府直轄機関である「昌平坂学問所」を創立
- ⑪ 江戸時代を通じて武家社会を中心に「儒教」は日本に定着したが、この学問の展開は260余年の歴史を経て、やがて幕藩体制を揺るがす動きに繋がったのである

## (2) 四書は、以下の書物の総称

### ① 「大学」

- ・ 伝説では、孔子の弟子「曾参」の作とされている
- ・ 北宋の「二程」は、「大学は孔子の遺書にして、初学入徳の門」と称した
- ・ 「二程」の思想を継承した南宗の「朱熹」は「大学」を「礼記」より取り出して「論語」、「孟子」と同列に扱って四書の一つとし、「二程」の意を汲んで、四書の最初に置いて「儒学入門の書」としたもの
- ・ 儒家にとって必要な「自己修養」が「三綱領八条目」の形で書かれている

- ・ 「三綱領」は「明德」、「親民」と「止於至善」
- ・ 「八条目」は「格物」、「致知」、「誠意」、「正心」、「修身」、「齐家」、「治国」と「平天下」

## ② 「中庸」

- ・ 「中庸」は、「礼記」の中の一編
- ・ 史記の孔子世家が、「子思は『中庸』を作る」としたこと  
から孔子の孫「子思」の作とされている
- ・ 北宗の「二程」は、「『中庸』は孔門伝収受心の法」と  
称し、「二程」の思想を継承した南宗の「朱熹」は、  
「中庸」を「礼記」より取り出して「論語」、「孟子」と  
同列に扱って「四書」の一つとした
- ・ 「大学」が「四書の入門」であるのに対して、「中庸」は  
「四書の中で最後に読むべきもの」とされている
- ・ 有名な注釈書としては「中庸意句」があり、著者としては  
「司馬光」、「范祖禹」や「朱子」など十指を超える
- ・ 「中庸」は、「誠」、「性」、「道」など多くの概念についても  
述べられており、中でも「誠」は「中庸」よりも一層重要な  
概念ことも云われている
- ・ 「中庸」の『中』とは「偏らない」ことであるが、決して  
中間(大小、上下や左右の)を取りさえすれば良いという  
意味ではないことを理解されていないようである
- ・ 『庸』について「朱子」は、「平常」と解釈している



- ・ 「優れた点を持たない」と「平常」の両方の意味を含んでいるとして「中の道を『用いる』」という説もある

### ③ 「論語」

- ・ 「論語」は、「孔子」と「弟子たち」の言行録
- ・ 孔子の弟子たちによって整理された 短文 512篇が全20篇で構成されている
- ・ 篇名は以下の通り

学而(がくじ)第一  
為政(いせい)第二  
八佾(はちいつ)第三  
里仁(りじん)第四  
公冶長(こうやちょう)第五  
雍也(ようや)第六  
述而(じゅつじ)第七  
泰伯(たいはく)第八  
子罕(しかん)第九  
郷党(きょうとう)第十  
先進(せんしん)第十一  
顔淵(がんえん)第十二  
子路(しろ)第十三  
憲問(けんもん)第十四  
衛靈公(えいれいこう)第十五  
季子(きし)第十六  
陽貨(ようか)第十七  
微子(びし)第十八  
子張(しちょう)第十九  
堯日(ぎょうえつ)第二十

- ・ 注釈書としては、南宋の「朱子」が独自の立場から注釈を作り、「論語集注」(新注)としてまとめている
- ・ 「論語」は、「四書」の一つとしてあるが、主である「孔子」という書名になっていない理由は明らかになっていない(「四書」一つである「孟子」は現行の主が書名になっていることに対して呈された疑問である)
- ・ 漢書の巻30芸文志に『門人たちが書き付けていた「孔子」の言葉や問答を、「孔子」の死後に取り集めて論纂して「論語」と題した』との記述があり、これが書名となったという説もある
- ・ 中国の漢代には今文系統の教典として「魯論」20篇(魯地方で伝承していた「論語」と「齊論」22編(齊地方で伝承していた「論語」)があり、古文系統の典に「古論」21編(「孔子」の旧家の壁の中から発見された「論語」)があったと云われている

\* 注 「論語」には、3種類の系統があったが、統合されたものが現行版

- ・ 後漢の「張禹」は「魯論」を中心に「齊論」とを校合して「張侯論」を作り、更に後漢末に「鄭玄」がこれを基に「古論」と校合して作ったのが現行の「論語」とされる
- ・ 「孔子」は、紀元前552年に魯に生れた  
没年は、紀元前479年であるので、計算上は「73歳」の生涯である  
時代は、「春秋時代 (中国) 」
- ・ 今もご子孫が脈々と系図を継承されている  
(第77代が来日時に3年前にお会いしている)

#### ④ 孟子

- ・ 「孟子」は、儒教の思想家・哲学者である「孟子」の逸話・問答の集成である
- ・ 儒教の古典と位置付けられ、宋朝時代に重んじられていたとされている
- ・ 「孟子」の著者については、幾つかの異なる見解があり、漢朝の歴史家「司馬遷」は弟子の「公孫丑」と「萬章」の共著としている  
「朱熹」、「超起」(漢朝)や「焦循」(清朝)といった儒学者たちは「孟子」が一人で書いたものとしている
- ・ 注釈書としては、「朱熹」、「超起」や「焦循」のものが権威あるものとされている
- ・ 注目すべき書物としては、吉田松陰が書いた「講孟劄記」が挙げられる
- ・ 「孟子」の思想

「性善」 人は生まれながらにして善である

「四端」 善であることを説き、  
続けて「仁・義・礼・智の徳」を誰もが持っている  
四つの心に根拠付けた

即ち「惻隱」、「羞惡」、「辞讓」と「是非」を  
「四端」と定義

この「四端」を努力して拡充することで、「仁・義・  
礼・智」という「徳目」に達するとしている

「仁義」 「孟子」は「孔子」の説いた「仁」を発展させて「仁義」を説いている

「仁」とは「忠恕」(真心と思い遣り)であり、「義」とは「中庸」にあるように「事物に適切」であることを云われている

「王覇」 「孟子」は古今の君主を「王者」と「覇者」とにまた政道を「王道」と「霸道」に弁別して前者が後者に優れていると説いた

「民本」 「孟子」は領土や軍事力の拡大ではなく、人民の心を得ることによって天下を取れば良いと説いた

「天命」 天下は天より与えられると説いた  
天命・天意は人民の意思として示され  
人民が天子の治世に満足するかによって  
天命が判断されるとした

\* 君主たちとしては、「孟子」の思想を急進的な考えと捉え、歓迎しなかったように思われる

### (3) 五経は、以下の書物の総称

- ・ 「孔子」以前からの書物であるが、伝統的な儒教の考えでは、「孔子」の手を経て現在の形になったと云われている

#### ① 易経(周易)

- ・ 周の時代に作られた宇宙生成にまつわる陰陽未分化な太極から扱っている八卦を含む
- ・ 儒教的には、占いの知恵を体系化した書物を教典に取り入れたもので、「三易説」(変易、不易、簡易)が説かれている
- ・ 国家の歴史を変える程の影響を持った占いもあったようで、現在の占い等とは全く違った教えであった

#### ② 書経(尚書)

- ・ 堯・舜から夏・殷・周 三代の歴史書
- ・ 「孔子」が古聖王の記録100編を整理編集したという伝説がある
- ・ 中国に政治が始まって以来の歴朝の聖王賢臣が天命を奉じ、徳を明らかにし、刑罰を慎んで政教を施したことを記述した政治の理想を示す書物と云われている

### ③ 詩経(毛詩)

- ・ 周の時代に作られた中国最古の詩書で、漢詩の祖型
- ・ 「孔子」が西周時代歌われていた民謡や廟歌を編集したとされ、「礼(礼記)」と横断する所もあり、時の王侯を始めとする知識人の教養として必修とされた
- ・ 現行の教本は「毛亨」、「毛萇」が伝えた「毛詩」であり詩三百篇とも呼ばれる
- ・ その構成は、  
「風」=各地(国)の民謡を収集 (160篇)  
「雅」=貴族や朝廷の公事・宴席で奏した音楽の歌詞  
(小雅 74篇、大雅 31篇)  
「頌」=朝廷の祭祇に用いた廟歌の歌詞 (40篇)

### ④ 礼記

- ・ 周から漢の時代に纏められた礼儀作法の書物で49篇が記されている
- ・ この書物の成立には、大別して「随書」と「六芸論」の2説があるが、後漢以降は「随書」戴聖の「小載礼記」を「礼記」と呼び、宗代になるとこれが主流となった
- ・ 武士の礼儀、作法などの心得としては必須であった



## ⑤ 春秋左氏伝

- ・ 春秋の時代の魯の太子「左丘明」が作った歴史書と云われている
- ・ 「孔子」が編纂したと云われている歴史書「春秋」の代表的な注釈書の一つであり、紀元前700年頃から約250年間の歴史が書かれている書物
- ・ 当時の戦争に関する記載は詳細であり、後世の武士の必読書とも云える貴重な文献
- ・ 内容としては

隠公元年(紀元前722年)から十一年  
桓公元年(紀元前711年)から十八年  
莊公元年(紀元前693年)から三十二年  
閔公元年(紀元前661年)から二年  
僖公元年(紀元前659年)から三十三年  
文公元年(紀元前626年)から十八年  
宣公元年(紀元前608年)から十八年  
成公元年(紀元前590年)から十八年  
襄公元年(紀元前572年)から三十一年  
昭公元年(紀元前541年)から三十二年  
定公元年(紀元前509年)から十五年  
哀公元年(紀元前494年)から二十七年

#### 4. 藩校サミットの紹介

(1) 藩校は、「リーダー」としての「人の人たる道」を教える場であった訳で、その観点から全国の藩校でどのような教育が為されていたかを知り、その内容や精神を理解・共有して、現代の教育に活かす事を模索するために「漢字文化振興協会」が中心となり、平成14年に16藩の出席を得て、開催されたのが「第1回全国藩校サミット」（その後 昨年までに「15回大会」まで実施中）です

(2) 平成26年7月には、「行田市」に於いて「第12回全国藩校サミット」が開催され、「行田市」を挙げての大会となったことは、ご記憶にも新しい所と思います

忍郷友会も民間支援団体として協力させて頂きました

(3) 本年9月29日－30日には、第16回全国藩校サミットが京都府舞鶴市で開催されることになっています

(4) 「古典の日」が制定されて以来 地方公共団体にも当該法律の趣旨に沿って古典に親しむための施策を講じることを求める通達が出されていますし、「全国藩校サミット」は国家的要望に応える格好のイベントであると考えます

## 全国藩校サミット 開催趣旨

漢字文化振興協会

江戸時代、全国のいわゆる三百諸侯は、競って藩校を設け、武士や庶民の教育に当たった。それが、明治維新で閉校になった後も、地方の文教の拠点となった例が多い。

その伝統を継承する証として、藩校の名を高等学校に冠する例もある。

平成8年春より、弊会の前身である漢字文化振興会が各地新聞社と組んでの講演などをするうち、これらの藩校の伝統を受け継ぐ市町村や団体が連携すれば一層大きな力となるのではないかと考えた。

そこで、これまでに交流を持った所から始めようと二十数カ所に呼び掛けた所十六の藩校がこれに応じて集まった。

時に平成14年3月21日、場所は幕府立昌平坂学問所ゆかりの湯島聖堂で、これが全国藩校サミットの始まりとなった。

サミットでは、出席者それぞれが自藩の藩校の沿革や現在の活動状況などを報告し、情報を交換した。かくして実りある一日は終り、一同改めて江戸時代の教育制度の質(教育内容)の高さと量(普及状況)の豊かさに、思いを新たにしたことであった。

会の終了後、今後も互いに連携を密にし、毎年集まろうという声が自然に起こり、毎年開催することになった。

因みに、記念すべき第一回全国藩校サミット出席藩校は、以下の通り：  
北から、庄内「致道館」、岩出山「有備刊」、米沢「興讓館」、会津「日新館」、長岡「崇徳館」、沼田「沼田学舎」、忍「進脩館」、高遠「進徳館」、吉田「時習館」、福山「誠之館」、大洲「止善書院、明倫堂」、福岡「修猷館」、柳川「伝習館」、多久「東原庠舎」、薩摩「造士館」、琉球「琉球国学」  
以上16校

第二回以降の開催校は、以下の通りである

	開催年	藩名	藩校名	開催地
第二回	平成15年	会津藩	日新館	会津若松市（福島県）
第三回	平成16年	多久藩	東原庠舎	多久市（福岡県）
第四回	平成17年	高梁藩	有終館	高梁市（岡山県）
第五回	平成18年	高遠藩	進徳館	伊那市高遠町（長野県）
第六回	平成19年	庄内藩	致道館	鶴岡市（山形県）
第七回	平成20年	熊本藩	時習館	熊本市（熊本県）
第八回	平成21年	長岡藩	崇徳館	長岡市（新潟県）
第九回	平成22年	松江藩	文明館	松江市（島根県）
第十回	平成24年	水戸藩	弘道館	水戸市（茨城県）
第十一回	平成25年	薩摩藩	造士館	鹿児島市（鹿児島県）
第十二回	平成26年	忍藩	進脩館	行田市（埼玉県）
第十三回	平成27年	福岡藩	修猷館	福岡市（福岡県）
第十四回	平成28年	丸亀藩	明倫館・正明館	丸亀市（香川県）
第十五回	平成29年	金沢藩	明倫堂・総武館	金沢市（石川県）

## 5. 忍郷友会について

(1) 創立 明治38年（1905年） 113年の歴史です

(2) 平成25年8月 内閣府に公益財団として申請

(3) 現在 会員数 240名超

(4) 活動について

① 目的

地域社会、国家に役立つ人材育成の教育の支援  
会員相互の親睦  
知徳の涵養と人格の向上

② 一燈照隅の想いで、行政の出来難い事を支援

③ 具体的な事業活動:

進脩塾事業（忍藩こども素読教室、公開講座、  
親子素読教室、素読の出前教育）

読書推進支援事業

「浮城のまち行田少年の主張大会」の後援

親睦懇親会、講演会の開催、その他の後援事業

④ ご興味のある方々のご入会を歓迎いたします

## 6. 今 求められるものは

- (1) 古典、歴史に学ぶ
- (2) アナログ VS デジタル
- (3) 違いが判る — 出逢いと思い遣り
- (4) リーダーシップ — エリート教育
- (5) 日本人の誇り

## 7. 皆様へ 「 四つの キーワード 」

「 志 」

「 学 」

「 愛 」

「 感謝 」